

いんば沼

22号

編集・発行／(財)印旛沼環境基金

TEL 043-485-0397

2002年3月29日



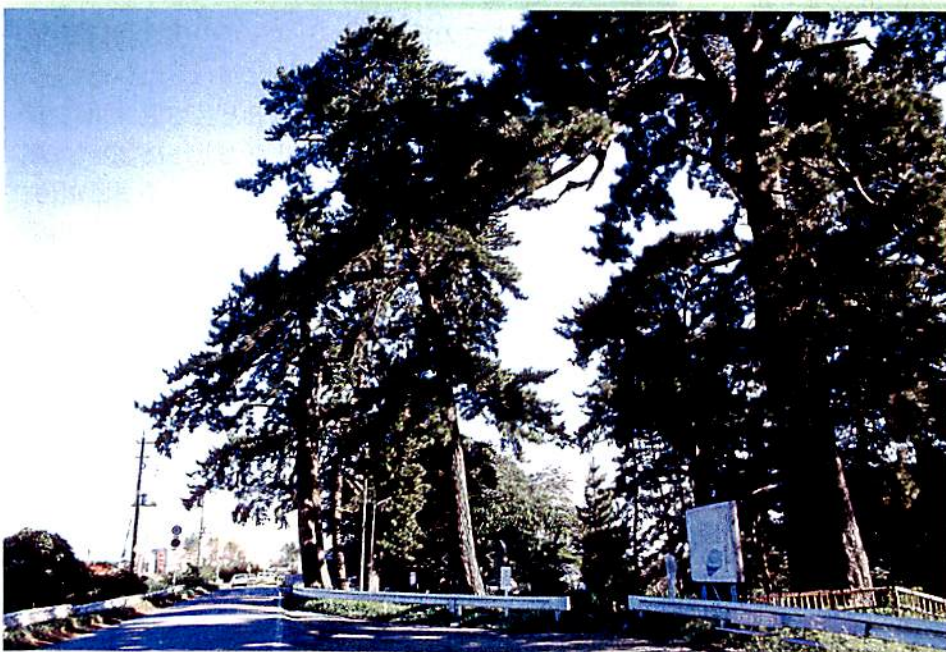
故 林 辰雄氏 撮影 旧甚兵衛渡し

懐かしい甚兵衛渡しと

甚兵衛の森の風景

昭和30年代の甚兵衛渡しの風景です。渡船場の案内と渡船場の様子が見られます。また、遊覧船の御用も承りますとあり、当時も印旛沼の景色を船旅で楽しんだり、鮎釣り等に船を利用した人達がいたことを示しています。

舗装道路から見た現在の甚兵衛渡しの風景です。松の様子はあまり変わらないようですが、現在の松はうろこ状の樹皮がふかく刻まれ、この近辺では全く見られなくなった老松の貫禄を示しています。渡船場の水路や田んぼは無くなり印旛沼・甚兵衛公園（甚兵衛の森）となっています。



上流のまち・鎌ヶ谷から

かわ・水・みどり

倉田 智子

鎌ヶ谷市は手賀沼水系、印旛沼水系さらに真間川水系と3つの分水界を持ちます。どの水域にも最上流にあたる言い換えられます。そして直接水辺が見えない距離的な隔たりのためでしょうか、水問題への市民の関心度は決して高いとはいえません。

私たちは市域を3つに分ける分水界に興味を持ち、平成8年に活動を開始しました。流れの始点を訪ね、水の行方を追い、水辺の生き物を調査しています。

平成10年より秋の活動行事として鎌ヶ谷周辺の川辺を歩き、市民の方々に川の様子を見てもらっています。大津川、根郷川、神崎川、二重川と回を重ねてきました。

どの水系にも最上流にあたる鎌ヶ谷、水路という表現がぴったりの、それほど川幅があるわけでもない、ただ生活の中の、洗濯、拭き掃除、台所やお風呂など、人から生じた汚れを水に移動させ、側溝や排水管から流れ出た水が集まって水量が増していく流れ、それが鎌ヶ谷の主な川です。

流れの中には自転車、家電製品などの投棄のほか、街中のゴミが風に運ばれ、落ち込んだり、空き地や駐車場などから、意図的に放りこまれたゴミが加わります。これらは流れを障害し、溢水の原因にもなることから、定期的に除去作業が行なわれています。

クリーン作戦的に住民の参加があることが望ましいのですが、時折見かける作業は、市民レベルでは困難なケースが多く、手が出せないのが現状です。

どの川筋を歩いても参加者の感想は「川が見えない」「川のそばに近づけない」と「川が汚れている」「水の汚れがひどい」に尽きます。

印旛沼流域に限っていえば、下水道の敷設率は93.9パーセントというのに汚れている。それは生活排水以外にも原因があるということです。自然系と呼ばれる汚れ、大気汚染による化学物質、農薬、肥料などによるものや、都市化で雨水が一時に川に流れ出し、地中



への浸透が減るために、湧水や浸み出し水がなくなって川の水量が減ることに起因します。生活排水が川の水量を豊かにしているのは、かなり皮肉なことです。この水系は下水道が完備しても川はきれいにならない、水質はよくなる見本といえましょう。だからこそ市民の暮らし方、関わり方が問われてくると思います。

鎌ヶ谷の井草水路に始まり、船橋との市境から二重川となり、北部の小室で、白井の七次川と合流、さらに神崎川と名を変えるこの川筋は、地図では北上して印旛沼に至るのですが、ある時「川が上に流れていくの？」ということばが参加者から出ました。水は低いところに向かって上流から下流に流れていきますが、地図上にまで上・下の感覚が働くことに気づかされました。

遠大な水循環の過程の途中から得た水で成り立つ人間の暮らし、水について私たちはどれほどの事を知っているのだろうかという思いから、水のことをまなび、その結果を伝えていこうと、今年度は「水環境を学ぶ手法の研究」に取り組んでいます。

私たちの今までの活動・・・プールの生き物観察会や炭焼き、川辺のウォーキングなどから気づいたことや手がかりを、伝えるためのヒントとして取り出しました。新たなまなびは、気がかりなことの確認や知識を、千葉県中央博物館開催の講座や展示、千葉県環境生活部開催のネイチャーゲームの体験講座などに積極的に参加することで得ました。

さらにアメリカの環境教育プログラム「プロジェクト・ワイルド」のエデュケーター講座を、鎌ヶ谷で開きました。市内の小学校の先生や、八千代、船橋の環境グループの方、リバーガイドの方、年齢は58才から24才まで幅広く、いろいろな価値観の方と接することが出来ました。

プロジェクト・ワイルドは幼稚園児から高校生までを対象にした、野生生物に重点を置いた環境及び環境

保全の教育プログラムで、本編、水辺編の2部構成です。

このプログラムの利用を決めるとき、園児、児童、生徒向けに開発されたものが市民にとって果たして適切なものか憂慮されましたが、なんの問題もありませんでした。継続して行われる学校教育とは違って、市民学習向けには時間的に凝縮したものが求められますが、テーマ選び、組み合わせ方に注意を払えば、効果的に利用できます。

日本人がなかなか到達し得ない、解決のために行動する部分は興味をひきます。そして理論を理解するためのシミュレーション体験は強烈なものでした。

伝える際のテーマ選びは、あれもこれもと悩み、盛り沢山になりました。印旛沼環境基金の白鳥孝治先生から「入り口と出口をしっかり押さえれば、中はいろいろあって良いのです」と助言を頂き、安心しました。新年度の春からは伝えることをスタートさせます。



水辺のある公園で、季節の変化を楽しみ、鳥や水辺の生き物、植物の観察をしながら、水の見え目と数値（透視度計やCOD値）との比較、水の役割、循環、汚濁などの理解のために、自然観察や、ネイチャーゲーム、プロジェクト・ワイルドの手法を使っていきます。よろしかったらご参加ください。



沢山の泉

白井町にあるこの湧水は、下総台地でも有数の湧水である。谷津の谷頭にあたる杉林の谷あいにごんごんと湧いている。谷はやや平たく侵食していて小さい盆地のようにも見える。

平成元年にこの泉を初めて見たときは感動した。年数ものの杉林の中に、砂を巻き上げて湧き出すところが二カ所あり、一つは小さな祠のある島を中心にした池になっていて、今一つは、突然地下から湧き出してしっかりした流れになっていた。二つの流れはすぐ一つになって、濃緑の林の中で、明るく黄ばんだ砂の上をキラキラと輝きながら滔々と流れていた。その時、奥入瀬の溪流を思い出した程である。

印旛郡誌に、谷清村の史跡名勝として「沢山」を次のように述べている。「……水神の祠ありて沢山と称す。日本武尊の御手洗清水あり。この清水は民の田地を養うものにて、如何なる旱魃にても神明の水徳にて湧き出づること大海の如し。社より辰巳に御供田あり、云々」と。昔から村人に親しまれ、稲作に欠かせない清水であったことが伺える。

久しぶりに（平成12年9月）ここを訪れた。隣接する千葉ニュータウンの工事は更に進んでいた

けれども、林に入ると当時のまましっとりとした静けさを保っていた。しかし、祠を浮かべる池は湿地の状態で細々と保たれ、林の中で地下から噴出する湧水だけが当時の面影を残していた。その姿は砂を巻き上げる力が弱く、傾斜した穴から流れ出る程度であった。奥入瀬を思わせたあの清流は、今や静かな流れになっていて、川底の落ち葉屑や黒い腐植土が目につく。その間に散見する淡黄色の砂が在りし日の清流をわずかに思い出させてくれる。

千葉ニュータウンは、泉のすぐ近くまで達し、都市化は容赦なく押し寄せている。土も人も、すべて変わりつつある。このままでは、昔の大湧水をそのままに保つことは、不可能に近いかもしれない。湧水の涵養地であった千葉ニュータウンは、地表面が固められ、雨水を保持する力が低下している。ブルドーザーで地層を破壊しているだろうから、根跡や割れ目などの間隙が壊され、水の地下浸透を阻害している可能性がある。これを回復させて、雨水の地下浸透を助長して、湧水の源となる水を涵養すれば、きっと湧水は力をつけてくるに違いない。湧水復活の夢を、みんなで実現しようではありませんか。

佐倉の植物 今昔

松平 喜美代



クサナギオゴケ

佐倉市は印旛沼を北に控え、そこへ水を送り込んでいる湧水が台地の緑地から、こんこんと出ている自然豊かな所と、私は言いたいです、「水と緑と歴史の町佐倉」とても良い言葉だと思います。歴史の町佐倉…。

まず享保年間に書かれた「古今佐倉真佐子」。著者の渡辺善右衛門は佐倉藩主稲葉家の150石どりの藩士でした。内容は当時の城下町をこと細かに書いています、面白いのは今でもその本を見ながら町の中を歩けると言う事です、善右衛門さんは特に植物に興味があり、寺・屋敷・道の植物を照会しています。

城内は松並木・堀の廻りは杉並木が多かったようで、不明門の辺はサイカチ・エノキの大木数百本で深山のようだと、本丸にはモチノキが2本あって、大聖院には源平桃が1本あり、他に佐倉中に無いとか、城内を離れると、山崎のハンノキの並木、五霊文珠寺（現在廃寺）のヤエザクラの古木のこと、江戸か京か大阪であったら、日本国中に聞こえただろう、田舎なので惜しいと、鹿島川の周りにはモジズリ・カキツバタ・サギソウが咲いていたそうです、サギソウなどは現在佐倉には皆無ですが、樹齢300～400年のスダジイなど古木は残っています、善右衛門さんも見たであろうと思われます。

次に目に触れられるのは、昭和6年以前に書かれたと思われませんが、年代も記録者の名前もないのですが、根郷の植物目録があります、推察では学校の先生方が調べられたかとも思われます。

地区的に調査した資料では、開発にともなう環境影響評価の調査、平成2年9月に三菱地所株式会社が調査した西御門・内田方面の仮称“ちばりサーチパーク開発”にともなう調査です、シダ植物・種子植物で582種記録しています、トチバニンジンの記録が有りますが私たちでは確認できませんでした、佐倉ではトチバニンジンのことはこの記録だけです、エンシュウベニシダは、佐倉野草会、その他の人々も確認しています、担当者へ保護を願いでしたが、公園になる場

所なので保存できますと言う返事でした、平成13年の今日、まだ地所内には公には入れませんが、すっかり変わってしまった地形に場所が特定できません、ヌマゼリ・クサレダマ・トモエソウなど、佐倉では少ない植物が造成により消えています。

造成によっても佐倉の地形を残し貴重種を保護している所があります、大日本インキ化学工業KK総合研究所および川村記念美術館です、約30ヘクタールの敷地内の一部は昔のままで台地の下からは湧水があります、1990～1991年に調査した植物は、1992年に「総研・美術館敷地内の植物」としてまとめられ、552種記録しています、貴重種のイワヘゴ・クサナギオゴケ・サガミランモドキなどがありました、ヤマユリの保護地になっています。

佐倉野草会では昭和55年より毎年佐倉市から委嘱されて、市内の特定の場所を植生調査（緑の現況調査）を行ってきました、10数年の間には調査地が造成されてしまった所もあり、木が繁りすぎて下草が減った所もありました、印旛沼土手はもっとも変化した所で、サイクリングロードが出来たため帰化植物ツボミオオバコ・クスタマツメクサ・アレチウリが増えてきました。

これらの調査の記録と会員達の情報、標本を集めて、1992年に未完成とはわかりながら、とにかく基礎を作っておかなければと、植物目録をまとめました、約980種、佐倉市としては珍しい、マメツタ・サンシヨウモ・マツモ・ウシタキソウ・ガガブタ（消滅）アブノメ・トチカガミ・ミズオオバコ・オニノヤガラもちろんサクラオグルマなども記録されています。その後佐倉市初見植物として追加した植物が平成13年3月までに、195種増えました、この中には佐倉市が行った「佐倉市自然環境調査」に参加した会員が確認し標本を得た植物も入っています、シダ類が一番多く追加され、マツバランを始め佐倉市内ではまれな種類です、佐倉で1本しかないイヌビワが見つかったり、以前か



ナガミヒナゲシ

らあって気がつかなかった植物、ホドイモ・ショウブ・クロヤツシロラン等のほか新しい帰化植物が入っています、ナガミヒナゲシ・ビロードモウズイカ・ナガエツルノゲイトウなどが増えてきています。

今回専門家と市民がボランティアを巻き込んで行われた、佐倉市自然環境調査は、平成8年から10年にかけて3年間21小学区に分けて、植物部門は486回ローラー作戦で調査をしました、出現植物は園芸品の逸出なども入れて約1500種。なるべく標本を作り提出をする形です、私は佐倉東小区、和田小区を担当しましたが、他地区への応援、勉強をかねて参加し、道の無い林、森の中を藪ごぎをしながら、専門家の後をつけて調査しました。佐倉を廻って以前から感じていたことですが、この佐倉の中でも、東側の佐倉、西側、南側と植生が違ってくる感じがします、西側の志津地区は10年くらい前には道端のいたる所にミズタマソウがありました、また先崎の鷲神社の境内には竜巻で杉の大木が倒れ、林が明るくなったウシタキソウが出現し群落を作りました、草刈り、その後の植林のため、固体数が減りつつあります。東地区の城址公園・飯田・大佐倉・八木にはウラジロガシが多いです、南側の地区は林のマントにミツバウツギが多く、この辺から八街にかけてよく見かけます、この地区は緑の多い所でいまだにスギ・ヒノキの植林が行われ、林床も良く手入れされています、製材屋も仕事をしているところです、このように林床をきれいにしていると、ホトトギスや出現したりクマガイソウの群落が出来ます、斜面には春になると可憐なカタクリが群れをなして咲きます、休耕田にはタコノアシ・マツカサススキ・サンショウモがあったり、昔ながらの佐倉の野山があります。

佐倉の植物で特記したいのはサクラオグルマと、クサナギオゴケ、最重要保護植物はアズマイチゲ・セリバオオレン・ルリソウ・オオニガナです。

・サクラオグルマは与世里盛春が佐倉の寺崎で発見し、牧野富太郎に認められサクラと言う名をつけた植物だが、牧野氏はこれを学会に発表していないので学

問的に確立していません、しかし私達が調査した段階では、茎中部の葉が茎を抱いていたり（サクラオグルマ）線点・葉裏の状毛のちがいが、特に寺崎の休耕田でホソバオグルマの群落とサクラオグルマの群落が並んでいたことで良くわかりました、根のランナーで繁殖する両者は、自然界ではこのような群落を作るのかと思った、黄緑色と緑色にはっきり分かれていました。



サクラオグルマ

クサナギオゴケについては、昭和60年5月に小篠塚で見つかり昭和57年に四街道で見つかったのに続いて千葉県で2ヶ所目です、これは静岡・愛知・四国に分布し、神奈川県には記録がなく、佐倉は北限ではないかと言われていましたが、近年、酒々井、富里でも発見されています、ガガイモ科のあまり目立たない紫色の小さな花です。

佐倉市の植物調査をし、この中の貴重種・佐倉らしい植物を周りの自然と共に保護したいと思いました、これには土地持ちの人たちの理解と協力が必要です、また埋土種子から発芽する植物、外から入る帰化植物などまだまだ佐倉の植物の移行はあり、私達は継続して調査記録して行く義務があるかと思えます。



クスダマツメクサ

自ら学び行動する環境学習

富里町立富里第一小学校

教諭 一場 郁夫

1. はじめに

本校の学区には、富里を水源地として印旛沼に注ぐ高崎川が流れていて、その周囲には谷津が点在しています。そのため都会から比べると恵まれた自然環境にあるといえます。しかし、一方でスプロール（不規則に広がる）現象による住環境及び河川の護岸工事等により、環境問題をはらんだ生活環境ともなっています。

このような環境の中で生活している子どもたちにとっては、地域の環境を見つめ直すことが大切です。本校では、子どもたちが地域の環境をテーマにした学習を進めることで、身の回りの環境に対して関心を持ち、環境問題に対して自ら考え、よりよい環境づくりをめざして進んで行動できる環境学習の研究を進めています。

2. 環境学習へのアプローチ

(1)基本的な学習の流れ

環境学習の目的は、学習の対象である環境の現状を一人一人がよく知り、その現状から問題意識を持ち、行動化へと発展していくことです。

したがって、本校では、基本的に次のような学習の流れを取り入れています。

- ①現状認識【つかむ段階】
- ②現状に対する問題解決的学習【学ぶ段階】
- ③環境保全への行動化【広げる段階】

この【つかむ段階】での現状認識をきちんと押さえないと、子どもたちの心の中に地域の環境に対する切実感や愛着感は生じてきません。そうすると学習内容は表面上のものとし、その後の学習においても、子どもの主体的な学習活動は見られなくなってしまいます。したがって、総合的な学習の時間では、学習を行う環境の中での現場学習や遊び体験の場と時間を十分に確保することが大切となります。

(2)環境学習発表会【広げる段階】

環境学習発表会は、各学級で取り組んできた環境学習の成果を、全校児童及び地域に向けて発信することで、学習内容の確かめと表現力の向上を図るとともに、

学校全体や地域への啓発活動を行うことを目的としています。

平成13年度のプログラム

- ①はじめのことば
- ②児童会長のはなし
- ③全校合唱「たんぽぽ」
- ④2年生・「学校のまわりの自然」(劇)
- ⑤3年生・「富里町の生き物」(ビデオ)
・「メダカ」(劇)
- ⑥4年生・「よみがえれ高崎川」(ビデオ)
- ⑦5年生・「米作り」(ペープサート・模造紙)
- ⑧6年生・「美しいまち環境作り」(写真)
- ⑨環境委員会「アルミ缶回収について」
- ⑩感想発表「各学年1名及び参観者」
- ⑪全校合唱「君をのせて」
- ⑫校長先生のおはなし
- ⑬おわりのことば



(3)とみいちふるさとランド【つかむ・学ぶ段階】

学校から歩いて15分ほどの所に「とみいちふるさとランド」という環境学習の場があります。湧き水が出てくる自然環境豊かな2アールほどの土地には、サワガニやカワニナなども生息し、総合的な学習の時間の「とみいちタイム」には網や虫かごを持った子どもたちの歓声が響き渡っています。



3年「富里町の生き物」での学習活動

この「とみいちふるさとランド」のねらいは、子どもたちが自然とのふれ合いを通して環境の大切さを実感する環境学習を行うこととあります。主な学習活動としては、

- ①水環境の中での自然とふれあう体験学習
- ②米作り体験学習
- ③よみがえれメダカプロジェクト

を計画しています。

今までの環境学習は、子どもにとって実感の伴わない教師主導の机上プラン的な学習が多かったのですが、子どもたちに自然環境の中での試行錯誤（失敗経験を含む）を通して、自分たちの力で学習を進めていく主体的な学習活動の場を保障することを目的としています。この「とみいちふるさとランド」での活動を通して、子どもたちの口から「メダカの学校」が自然に口ずさめるような環境を取り戻し、ふるさと意識が育まれることを願っています。

3. 授業実践－4 学年「よみがえれ高崎川」

(1)ねらい

- ①学区を流れる高崎川について調べ、高崎川の昔の姿と現状について知ることができる。
- ②高崎川が流れ込む印旛沼や他の河川との比較を通して、河川における環境保全について考えることができる。

(2)学習の流れ

【つかむ段階】

- ①「水のはなし」のビデオを視聴することで、人間のくらしと水の間接関係を理解し、高崎川に対して関心を持つ。
- ②高崎川での遊び体験を通して、学習活動計画を立てる。

「高崎川はどのような川なのだろうか？」

【学ぶ段階】

- ①昨年度の4年生が実践した調査結果を知る。
- ②高崎川の現状について調査活動をする。
 - ・川的环境→現地調査／CODパケットテスト
 - ・川の生物→現地調査／図鑑
 - ・昔の川の様子→地域へのアンケート調査
- ③調査内容をまとめる。
- ④調査内容を発表し合い、高崎川の現状について話し合うことで、新たな課題を設定する。
「昨年度の調査内容と比較した新たな課題」
- ⑤今年度の調査方法で調査活動をする。
- ⑥調査内容をまとめる。
- ⑦調査内容を発表し合い課題について話し合う

「高崎川をよみがえらせるためには、どうすればよいのだろうか？」

【広げる段階】

- ①高崎川の現状をもとに、各自で高崎川の環境を改善するためのプランを考える。
- ②各自のプランを提案して高崎川サミットを開く。
- ③高崎川サミットをもとに、活動計画を立てる。
- ④活動計画にそってエコアクションを実践する
- ⑤高崎川について環境学習発表会で発表する。

4. おわりに

環境学習の究極のねらいは、環境保全への行動化です。そのためには子どもに活動の場を保障することが大切です。子どもたちが地域の環境をよくするために自ら考え、自分たちの手で何かができるという手応えを感じ取ることで、実践的な子どもに育ててほしいと思います。

一杯の水

小学校の頃、時々片道6、7キロの遠足がありました。暑い日射しに照らされるので、持ってきた水筒の水もなくなり、みんなノドがカラカラに渴いていました。

ひと休みするとき、近くにツルベ井戸を見つけました。われ先に駆け寄って、桶に口をつけて飲みました。この冷たい水の味は今でも忘れません。自分の飲む順番のくるまでの長かったこと、やっと口にした桶は厚い板にコケがついていて、飲むよりもこぼす水の方が多かったこと、いろんなことが思い出されます。

駅のプラットホームには、きっと水飲み場がありました。丸いピンポン球のような飲み口から、丁度よいあんばいに水を出して飲みました。出し過ぎて噴水にしてしまっていて、周りの人に水をかけてしまったこともありました。

大きな駅には、冷たい水の出る場所もありました。ステンレスの清潔なボックスの下のペダルを踏むと冷たい水が湧いて出ました。

駅には今、清涼飲料水の自動販売機が一杯並んでいます。冷たいジュースや温かいコーヒーが何時でも飲めます。大変便利になりました。しかし、一時のノドの渴きをいやすのに電気の塊りと言われるアルミの缶を使い、その後始末に困るようになってしまいました。

(印旛沼まめ新聞 平成元年9月号より)

印旛沼の抽水植物

コウホネ



昭和30年代では、印旛沼は水生植物の宝庫といわれ、約45種の水生植物が見られました。最近の印旛沼の水生植物は、ヨシ、マコモ、ヒメガマ等の抽水植物と、オニビシ、アサザナなどの浮葉植物がわずかに生育しているに過ぎません。

スイレン科のコウホネは、ハスの仲間です。太い白い地下茎があり、それが「川骨」のように見えたので、そのことから名称が付いたといわれています。光沢のある濃緑色の葉と黄色の大きな花が目立つ植物です。

かつては、夏になると印旛沼や周辺の池、小川などに普通に見られましたが、耕地整理による水路の改修や、水質の悪化等で、稀な植物となってしまいました。

現在では、千葉県並びに佐倉市の重要保護植物となっています。重要保護植物とは、将来千葉県や印旛沼周辺から絶滅するおそれがあるか、それに近い状況になると推定できる植物のことです。

保護対策としては、水域の環境を良好に継続し、生育可能な水路形態を持続的に整備保全する事が上げられています。地中の種子が発芽する可能性がある環境を、造り上げていくことも必要になってくると思います。

佐倉市自然環境調査報告書によると、佐倉市の重要保護植物は24種で、そのなかでの水生植物は、コウホネ、トリゲモの2種となっています。

佐倉市重要保護植物24種

オオカナワラビ、イワヘゴモドキ、ウチワゴケ、コウホネ、トリゲモ、イヌナズナ、クロウメモドキ、ヤブムグラ、ゴマノハグサ、サクラオグルマ、ホソバオグルマ、ハバヤマボクチ、ツクシイワヘゴ、ヒメカナワラビ、ホソバイヌタデ、ヤマブキソウ、イヌハギ、フナバラソウ、マルバザトウガラシ、キキョウ、ヤブスゲ、ハナミョウガ、クマガイソウ、ヨウラクラン。



編集後記

宗吾霊堂（鳴鐘山東勝寺）承応元年（1652）に、農民を救うため将軍に直訴して死罪になった、木内惣五郎が祀られています。禁を犯して宗吾様の江戸行きを助け、印旛沼を渡した甚兵衛の名を残した甚兵衛渡しは、「甚兵衛の森」として残されています。昭和30年代と現在の写真です。黒松の老木は千葉県でも貴重なものとなり、「印旛沼・甚兵衛公園」のシンボルとなっています。

今回は、佐倉市の植物同好会「佐倉野草会」の長い年月を掛けた地道な活動。

富里町の小学校では、総合学習として取り組んだ高崎川の環境浄化活動。

鎌ヶ谷市の「かわ・水・みどり」川の流れにしたがっての環境調査活動。

かつては水路を彩っていた、コウホネの現状について紹介しました。

印旛沼は、周辺15市町村の、環境の鏡であると言われていています。私達一人一人の出来ることは微々たるものかもしれませんが、周辺住民70万人が行えば、印旛沼水質浄化の力強い行為となると思います。

たまには、印旛沼の自然にふれ、ゆったりとした時間をお過ごし下さい。

読者の皆様の印旛沼に寄せる様々な情報をお待ちしています。